

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.97

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

<エッセイ>

英語民間試験問題の行方

一年頭のご挨拶—

竹中龍範

明けましておめでとうございます。元号が改まって初めての新年、皆さまにはいかがお迎えでしょうか。本年も支部活動の活性化に向けて一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

昨2019年の11月1日、文部科学省より「大臣メッセージ(英語民間試験について)」が発表され、「令和2年度の大学入試における英語民間試験活用のための『大学入試英語成績提供システム』の導入を見送ること」が伝えられました。そして年明けの1月15日、新たに「大学入試のあり方に関する検討会議」が設置され、第1回会議が開催されました。ここでは、今回の入試改革の目玉とされた英語の民間試験利用、国語・数学の記述式問題導入が見送りとなったことを受けて、「失敗した経緯の検証も行いながら、1年をめどに結論を出す」(『朝日新聞』2020.01.06)べく議論が行われることとなっております。ただ、その検討会議委員の顔ぶれをみると、関係の教科を代表する立場から名を連ねているのは各教科1名に過ぎず、多くはいわゆる名誉職にある方々で、実務的な観点からの問題も俎上に上せて議論する必要があることを考えると、果たして適切な布陣であろうかと首を傾げざるを得ません。また、1年間で提言をまとめるよう求められているとの点についても、そもそも今回の事態に至った英語民間試験、国・数記述式問題の導入という方針が決定されるに至ったその道筋にどれだけの時間をかけて、いかなる内容の議論を重ねたのか、その過程において今回の破綻をもたらした陥穽はどこにあったのか等々、これらを分析するだけでも優に半年、1年を要することでしょう。その辺りのことを飲み込んでの期限設定なのでしょうか。

ひるがえって、そもそも入試を変えれば学校現場の教育実践が変わるということは一義的に決まるのでしょうか、或いは、両者の間に高い相関性があるのでしょうか。大学入試センター試験の外国語(英語)において、共通一次の時代から引き続いて行われてきた筆記試験だけでは英語の話しことばに係る学力が測れないからと、「英語リスニング」が導入されたのが2006年でした。それによる成果はいかなるものだったのでしょうか。少なくとも筆者には、この時を境に大学入学生のリスニング能力が飛躍的に伸びたとの実感はありませんでした。筆者の勤めていた大学では、共通一次以来、個別試験の英語において、教育学部受験生にはリスニング・テストを課していましたが、これは、学校現場に対してなにがしか良い影響が及べばと願ってのことでした。しかしながら、共通教育英語(教養英語)の授業を見る限り、残念ながら、期待に応えられるだけの成果にはつながってなかったというのが正直なところだと思います。

これらのことは、まさに今につながる歴史です。その検証を省いたところでの議論は成功確率の低いものとならざるを得ないでしょう。1年後にどのような提言が出されるのでしょうか。否、そもそも提言がなされ得るのでしょうか。

(日本英学史学会中国・四国支部長)

令和元年度 第2回(通算81回)研究例会(津山例会) 報告



津山洋学資料館前にて (2019.12.14.)

日本英学史学会中国・四国支部第2回(通算第81回)研究例会は次の通り開催され、大変充実した議論が交わされました。ご参加くださいました皆様に、篤くお礼申し上げます。

日 時： 2019 年 12 月 14 日 (土) 12:30 受付開始

会 場： 津山洋学資料館 GENPO ホール

岡山県津山市西新町5 TEL 0868-23-3324

開会行事 (13:00～13:10)

支部長挨拶 竹中 龍範 (元 香川大学)

研究発表(1) (13:10～14:00)

『英和対訳袖珍辞書』復刻に向けて—箕作貞一郎との関わりを中心に—

山田 克惟 (宗八) (山田共学道場)

司会 河村 和也 (県立広島大学)

研究発表(2) (14:10～15:00)

幕末から明治初年の津山における英語学習—宇田川興斎・準一の活動から—

田中 美穂 (津山洋学資料館)

司会 竹中 龍範 (元 香川大学)

閉会行事 (15:00～15:10)

副支部長挨拶 馬本 勉 (県立広島大学)

津山洋学資料館 館内見学 (冬季企画展「津山藩の英学事始」開催中) (閉会后～16:30)

忘年懇親会 (17:00～19:30) 銀水 (津山市北園町 22-4 TEL 0868-22-8353) にて

研究発表①

『英和对訳袖珍辞書』復刻に向けて
—箕作貞一郎との関わりを中心に—

山田 克惟 (宗八) (山田共学道場)



【発表を終えて】

「英和对訳袖珍辞書」復刻に向けてと題して、箕作貞一郎とのかかわりを中心に発表させていただきました。

1853 年 7 月マーシュウ・ペリーが浦賀に来航したとき、堀達之助は彼らに「I can speak Dutch.」と話した。おそらくその口語は日本で最初に発せられた英語であった。文久 2 年 (1862 年) に「A pocket Dictionary of the English and Japanese Language」『英和对訳袖珍辞書』が完成する。それはペリー来航後 9 年経過していた。「袖珍辞書」編集に協力した者の中に、津山藩医箕作阮甫の孫、箕作貞一郎、のちの麟祥がいる。

津山藩蔵書として津山に存在することの意義を 12 月 14 日津山洋学資料館にて発表の機会を得たことを誠に光栄に思います。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

【参加者の感想】

◆津山に残る「英和对訳袖珍辞書」を元にしてこれを活字翻刻されたことに係るご発表でしたが、「対訳袖珍」を巡っては多くの研究が重ねられていて、近くは、その文久 2 年初版の現存状況が調査・発表されたり、その初版・再版の校正原稿が出現して、その復刻がなされ、さらにその内容分析が発表されたりと、先行研究の蓄積が行われております。その中にあって、文久 2 (1862) 年、慶応 2 (1866) 年、慶応 3 (1867) 年、明治 2 (1869) 年に刊行された各版のうち、文久 2 年版のみが復刻されているのに対し、今回翻刻されたものは、その慶応 3 年版、もしくは明治 2 年版と思われるもので、その意義は多大であると考えます。先行研究をしっかりと踏まえていただいて、その原本が津山の地に残っているこ

との社会的意味をも併せ論じたご論考にまとめていただければと願っております。 <Dragon>

◆『英和对訳袖珍辞書』と言えはすぐに堀達之助の名前が思い浮かびますが、今回のご発表ではこの辞書の編纂に携わった津山藩出身の箕作貞一郎についてご発表をいただきました。弱冠 17 歳でこの編纂事業に加わった貞一郎がどのような経緯で選抜されたのか、さらにはどんな役割を果たしたのか大変興味を掻き立てられました。機会を改めて、貞一郎の語学の才能を示すエピソード等をご教示いただければと思っております。また、ご多忙中、『英和对訳袖珍辞書』を復刻されたそのエネルギーギッシュなお仕事ぶりに感服いたしております。

なお、Preface for the Second Edition の第 2 段落に見える、it left me no sufficient time, but to correct...のbutはexceptの意味で用いられていますので、「...訂正したり、...付け加えるのには十分な時間があるとは言えません」は誤訳で、「...訂正したり、...付け加えたりする以外、十分な時間はありませんでした」(十分な時間がなかったけれども、なんとか訂正や追加は出来ました)とすべきではないでしょうか。ご参考になれば幸いです。

<E. Woodhouse>

◆袖珍辞書の復刻とその内容の紹介でした。忙しい中 700 頁の辞書を 7 年間かけて復刻された先生の熱意と労苦に敬意を示します。二版は、大修館が復刻した『諸厄利亜語林大成』のように本物そっくりに同じ和紙を用いて復刻されることを期待します。それだけの歴史的な価値はあると思います。 <YH>

◆山田先生が『英和对訳袖珍辞書』の復刻に取り組まれた、長年にわたる情熱とご努力に深く敬意を表します。その貴重な成果を私共にも分け与えて下さり、誠にありがとうございます。当時の訳語に関する分析も興味深く拝聴いたしました。解読困難で●●とされている部分が今後解明されることを期待しています。

<安部規子>

◆先生のご発表をうかがい、改めて津山英学の力強さに触れることができました。幕末期の英和辞典編纂にどれほどの情熱と労力が必要であったか想像もできませんが、その復刻にかかる山田先生の思いはそれ以上であったと感じています。発表資料を拝見し、津山の箕作が当時の洋学・英学になした貢献は、ひいては日本の近代化につながったことを痛感します。また、貞一郎がジョン・ワイルから英学を学んだことや、箕作家と広島の実家との関係など、さらに興味を持ちました。今後の研究にさらなる刺激を与えていただき、ありがとうございます。 <Horse>

研究発表②

幕末から明治初年の津山における英語学習

—宇田川興斎・準一の活動から—

田中 美穂 (津山洋学資料館)



【発表を終えて】

津山藩は、宇田川家や箕作家といった優れた洋学者を輩出したことで知られていますが、彼らの主な活躍の舞台は江戸でした。では、国元津山ではどのように洋学が受容されたのか、それが今回の報告の出発点でした。江戸詰の藩医だった宇田川興斎と息子準一は、幕末から明治にかけて、藩命で8年半ほど津山へ移り住んでいます。「勤書」(早稲田大学図書館所蔵)や「興斎交友録」(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵)の記録を通じて、興斎と準一が津山滞在中に国元の医師や藩士の子弟に英学を教えていた様子を報告しました。報告後、様々なご意見や情報提供をいただくことができ、今後の課題が見えてきました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

【参加者の感想】

◆津山の地から江戸・東京に活躍の場を移した宇田川、箕作の一族については幅広く研究が行われているが、本日のご発表は、地元津山における英学・英語学習がいかなる状況であったのかを明らかにしようとする意欲的なもので、大いに関心をそそられました。地方英学史の研究は、中央英学史の研究と無縁のものではあり得なく、常に中央をにらみながら進められるはずのものながら、時に、各地方の英学は慶應義塾の卒業生を教師に迎えて行われ、さながら慶應義塾の出店的英語教育が展開されたと分析されることがあったりすると、今回取り上げられた宇田川興斎・準一の場合はいわゆる福沢流とは異なる英語学習を経ており、この両名がどのような英語教育を行ったのか、すでにお調べの資料を分析されることがとあわせ、地元津山に未だ発見されずに残されているであろう当時の教材などを発掘していただいて、

ぜひ、その解明に努めていただくことを期待しております。『英学史論叢』へのご投稿をよろしくお願いいたします。

<Dragon>

◆津山藩の国元では洋学・英学がどのように受容されてきたのか、これまで等閑に付されてきたこの分野に果敢に挑戦されたことにたいして敬意を表します。また、「宇田川家勤書」、「国元日記」、「旧津山藩立学校取調要項」等の貴重な資料を駆使されて国元の英学受容の一端を明らかにしていただき大変勉強になりました。今後も津山藩の洋学・英学受容の実態についてさらに掘り下げてくださることを期待しております。

<E. Woodhouse>

◆宇田川準一には先行研究がないと言われました。これほど翻訳や出版を行っていないが意外でした。出身地ならではの発表でした。津山は蘭学だけでなく洋学の資料がまだまだ眠っているとのこと。これからも地元の研究者らしい発表をこれからも楽しみにしています。

<YH>

◆津山藩における洋学者の系譜について詳しく知ることができ、ここから優れた人材が多数輩出されていることに感銘を受けました。今回のご発表では宇田川興斎と準一に焦点を当てられていましたが、一つ一つのことが非常に多くの史料や文献に基づいて積み上げられていることに特に感服いたしました。今後私自身少しでも勉強していきたいと思いました。

<安部規子>

◆宇田川興斎と準一による英学教授について、様々な資料を駆使してお話しいただき、宇田川家についての理解と興味が一層増しました。ありがとうございます。資料にもとづく手堅い歴史研究を進められる方法論からも多くを学ばせていただいたと思います。ぜひまたご発表をお聞かせください。

<Horse>

【研究例会全体について】

◆津山洋学資料館の方々のご協力により気持ちのよい例会になりました。また、山田宗八先生からはご自身が復刻された『英和对訳袖珍辞書』第2版を頂戴し大変感謝しております。

<E. Woodhouse>

◆今回初めて津山を訪れましたが、津山駅から津山洋学資料館への道には伝統的建造物群が並び理想的な立地にあると感じました。研究例会が行われたGENPOホールは、アジサイの花に雨が降り注ぐイメージで設計されたものとのことで、よい雰囲気の中、各先生のご発表を拝聴することができました。また館内見学も大変興味深く、洋学資料館の皆様のお陰で一層すばらしい例会となり感謝しております。

<安部規子>



館長挨拶

◆ご当地津山における研究例会は、いつもながら、例会開催自体を暖かく迎えて下さり、今回も会場設営から懇親会の設定まで、至れり尽くせりの歓迎をいただいた上に、研究発表がいずれも津山に関係する内容のもので、しかも、会場をご提供いただいた津山洋学資料館では、本例会に合わせて冬季企画展「津山藩の英学史始」を開催していただくなど、大きな成果を得た一日となりました。研究例会には地元の方も多数参加下されて熱心にお聴きになられていて、肝腎の支部会員参加者の少なさに恥ずかしさを覚えたほどでした。物心ともに大きなお土産をいただいた例会で、ご発表をいただいたお二人、ならびに、洋学資料館の皆さまに篤く御礼を申し上げます。＜Dragon＞

◆今までの例会と異なり地元色の強い大変内容の濃い研究例会でした。この会の開催にご尽力頂いた、

学会事務局の皆様、山田先生、津山洋学資料館の皆様感謝申し上げます。ありがとうございました。

<YH>

◆津山英学の奥深さを強く感じる例会でした。素晴らしい会場とご発表、さらに地元の方々のご参加を得て、非常に密度の濃い充実した会となりました。津山洋学資料館の仁木館長様をはじめ、職員の方々には格別のご配慮を賜りました。篤くお礼申し上げます。企画展「津山藩の英学史始」の展示にも感動し、津山各所から提供された英学資料の厚みを堪能しました。この地の洋学・英学の歴史に思いを馳せ、ぜひまた訪れたいという思いを強くして広島へ戻りました。庄原からの距離も思いのほか近く、折を見て再訪させていただければと思っております。ありがとうございました。＜Horse＞



中国・四国支部事務局より

>> 令和元年度第2回役員会

役員会は支部例会に先立って行われ、次の議題について協議を行いました。(出席者5名)。

- ・令和元年度活動報告
- ・令和2年度活動計画
- ・支部総会・研究例会規程について

>> 『英学史論叢』第23号原稿募集

前号のニューズレターでお知らせした通り、日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英学史論叢』第23号(2020年5月発行予定)の投稿論文を募集しています。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

原稿提出締切は、**2020年2月20日**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

- ・ご投稿に際しては、ニューズレター前号に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。次のウェブサイトにも掲載されています。

<http://tom.edisc.jp/eigaku/yoryo.pdf>

- ・標準書式にそったテンプレートファイルをご希望の方は、事務局までお知らせください。

メール: eigaku@tom.edisc.jp

- ・研究論考・研究ノートは、正副計3部をお送りください。正本1部にのみ著者名を明記し、副本2部には著者名を伏せてください。
- ・英学史随想、書評等は1部お送りください。

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費（一般3,000円、学生2,000円）をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。

これからお振込みの方は、次の口座までよろしくお願いいたします。（振込手数料をご負担くださいませうお願いいたします。）

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合

（口座番号）01360-9-43877

（加入者名称）日本英学史学会 中国・四国支部

他の金融機関から振込む場合

（店名）一三九（イサキユ）店（139）

（口座番号）当座 0043877

（加入者名称）日本英学史学会 中国・四国支部

>> 2020年度 第1回研究例会 発表者募集

来年度の支部総会、ならびに第1回研究例会は、2020年5月30日（土）、サテライトキャンパスひろしま（広島市中区大手町）にて開催の予定です。研究例会での発表を希望する会員は、次の4点を明記の上、事務局までお申し込みください。

- (1) 発表者の氏名・所属
- (2) 発表題目
- (3) 発表概要（100～200字程度）
- (4) 使用予定機器の有無と種類

研究発表申し込み 受付期間

2020年2月29日（土）～3月30日（月）

広島英学史の周辺(63) 二度目の津山は、駅前広場で箕作阮甫像に迎えられ、洋学資料館に隣接する箕作阮甫旧宅も訪れました。家系図で、阮甫の娘せきは広島藩医の呉黄石（くれ こうせき）に嫁いだと知り、広島英学史との関係に興味を持ちました。▼ちょうど広島の英学の起こりを整理し、三原洋学所で学んだ人物について調べていたところでした。阮甫の孫である呉文聰（くれ あやとし）は統計学者となり、「国勢調査の生みの親」と呼ばれます。文聰は三原洋学所を回想していますが、彼はそこにいた英国人のブラックモール兄弟にふれ、「私どもは西洋学をやる積りで其所へ行って英語を習った。さうして少しの会話出来るやうになった。」と述べています。▼



阮甫像（津山駅北口広場）

広島英学史上の人物に、広島藩学問所・修道館で洋学の教授を務めた村田文夫（野村文夫）があります。呉黄石も同所で医学を講じていますので、両者は同僚であったわけです。ちなみに呉氏の呉は、黄石の父が呉に居たことに由来するとのこと。▼ところで村田文夫は後にジャーナリストとなり、週刊の風刺雑誌『團圓珍聞（まるまるちんぶん）』を創刊します。村田のことを調べている頃、偶然、『團圓珍聞』第21号（1877）が手に入り、紙面の戯画や英文の笑い話を面白く読みました。▼村田文夫のことをもう少し。適塾で学び、英国へ渡る前に、村田は藩校で頼事庵（らい いつあん）に漢学を学びます（事庵は山陽の息子）。ちょうど見延典子作の『頼山陽』を読んでいた、事庵にスポットを当てた件にさしかかったところでした。▼読んだり書いたりしていると、思わぬつながりに驚き、嬉しくなります。とは言っても、広島の英学史関連の範囲内ですので、驚くほどのことではないかも知れません。でも面白い！（馬）

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.97

2020年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 竹中 龍範）

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725（研究室直通）

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.97 January 31, 2020